「カーリング部」設立メンバーによる4年間の取り組みと地域づくりの可能性

～稚内北星学園大学カーリング部の歩みを事例に～

侘美　俊輔

● **要約**

2017年2月13日に稚内北星学園大学「カーリング部」が設立された．翌年度から「カーリング特待生」を利用した学生募集を開始するための受け皿として，カーリング未経験の1年生9名が入部した．本稿は，カーリング部を「ゼロ」から立ち上げた学生たちの，部活や練習の流れ，競技成績，部活への思い，練習における創意工夫や，「まちづくり」への可能性など，4年間の動きを参与観察と聞き取り調査を中心に追い上げ，総括しようという試みである．

本稿の目的は，稚内北星学園大学で設立された「カーリング部」の学生による部活動を事例に，立ち上げ当初から活動した学生たちの取り組みを俯瞰的に観察する．さらに，彼らによる「まちづくり」に向けた可能性を探ることとする．

設立当初は稚内市内の大会において負け続けていたが，約4年を経た現在では「市内に敵なし」という状況となるまでにチーム力が向上した．最終的に，9名中2名が部員として4年生まで活動を継続した．

● **キーワード**

カーリング
部活動
地域づくり
参与観察

はじめに

「そだねー」が 2018 年の「新語・流行語大賞（正規名称「2018 ユーキャン新語・流行語大賞」（自由国民社『現代用語の基礎知識』選））」に選出された．周知のとおり，「新語・流行語大賞」に選出された「そだねー」は，平昌オリンピックにて銅メダルを獲得したロコ・ソラーレ北見（現：一般社団法人ロコ・ソラーレ，以下「ロコ・ソラーレ」とする）の選手たちによって発せられた言葉である．試合のハーフタイムの「モグモグタイム」や，北海道弁のイントネーションがそのままテレビ中継され，その様子は，日本国内において広く話題となった．

時を前後して，北海道稚内市では，2020 年 5 月を目途に，通年利用可能な「カーリング場」の建設工事が進められている．しかしながら，2016 年から 2017 年にかけて稚内市議会では，カーリング場建設の是非が議論されていた．新聞報道や市民の声として，「新カーリング場建設」への反対意見が少なくはなかった．実際に，筆者が 2017 年 1 月に実施した「カーリング授業（授業科目「スポーツⅢ」）」（写真 1）には，批判的な「声」が地元紙に掲載された．当時の稚内市において，「カーリング」という言葉は，「新カーリング場建設問題」と不可避に結び付き，賛成派と反対派と市民を大きく分断する「象徴闘争」のような様相であった(1)．

写真１　スポーツⅢによるカーリング授業の様子（試合を実施）

2020 年 2 月現在，稚内市には旧米軍施設 (2) を利用した「稚内市カーリング場」があるものの，公式ルールに対応した正規規格のシートは，1 つしかない．また，老朽化が著しく，極度の低温，雨漏りが多数発生，さらには冷却装置がいつ故障してもおかしくない危機的状況である．そして，カーリング場の利用可能期間は，11 月から 3 月までの冬期間に制約される．そのため上述のような通年利用可能な「新カーリング場」の建設が必要と判断されたものと推察される．

カーリング (3) は，公益財団法人日本オリンピック委員会（以下，「JOC」とする）のホームページによると，「『氷上のチェス』と呼ばれるカーリングは，丸い石が回転（カール）する様子が髪の毛がカールする様に似ていたことから名付けられたといわれています．約 40 メートル先に描かれたハウスと呼ばれる円の中に，ストーン（石）を投げ入れて点数を競う競技」である．現在「カーリング」の研究が盛んに行われている領域は，「物理学」の理論が応用できる理工学的な分野である．山本ら（2018）は「カ

ーリングとAI」，日本機械学会「スポーツ・アンド・ヒューマン・ダイナミクス」部門では，「カーリング」の特集企画が組まれている．また，北見工業大学の上野ら（2014）や，桝井ら（2018）による「ポータブル戦術支援DBシステム『iCE』」の研究成果は，カーリング中継や，強豪チームのデータ分析に利用されている．以上のようにカーリングは，身体が介在するスポーツにおいて，物理学の理論が応用可能なものとして注目されてきた．ストーンの軌跡や，スイーピングにおいては，「摩擦係数」，「質量保存の法則」，「ベクトルの合成」など中学，高校で学習する数学，物理学の現象，法則，定理が競技にそのまま応用できるスポーツである．

ここで進藤（2008）による，「球技の本質とは何か」を参照したい．進藤の分類によると，カーリングは，「ターゲット型ゲーム（球送り・的当て型ゲーム）」に割り当てられる．彼の分類の論拠を以下に提示する．

> このゲームの目的は，予め与えられた静的な目標空間（標的）に硬質の球体やその類似物を，素手または，打具を手段として運ぶ正確さを競い合う競技である．ボーリング，ビリヤード，ゴルフ，カーリングなどの競技がこれに分類される．これらの競技の特徴は，相手の直接的な妨害なしに一人のプレー行為が交代によって遂行され，その得点が競われるというところにある．この競技の戦術的課題は，投球（打球）前の目標までの距離や最善の方向を把握し，それに基づいて球体や打具を正確に操作するという所にある．

進藤はカーリングについても言及しているが，現在のカーリングの常識から判断すると用語や，ルールの解釈など疑問を持たざるを得ない箇所が多数散見される．しかしながら，彼が，ボーリング，ビリヤード，ゴルフなどと同列に分類した指摘は貴重であると同時に，これらのスポーツの中で，「チームスポーツ」と呼べるものは，「カーリングのみ」である点を付言しておきたい．

ところで，稚内北星学園大学では，2017年2月13日に「カーリング部」が設立された．この設立の理由は，稚内北星学園大学の理事会決議によって，翌年度から「カーリング特待生」を利用した学生募集を開始するためであった．その受け皿として，カーリング未経験の1年生9名がカーリング部員となり，筆者は顧問（専門は健康づくり，陸上競技）となった．そこで本稿は2つの点に着目したい．

第1に，大学運動部への着目である．大学運動部を基盤とした大学スポーツは，「箱根駅伝」をはじめ，「早慶戦」，「早明戦」など全国中継がなされ，多くの観客動員を誇るコンテンツである．関東，関西の私立大学では，高校のトップ選手をスカウトし，獲得するということも珍しい話ではない．しかし奇妙なことに，清野（2009）によると，「大学の課外活動について学校関係法令は直接規定するところはなにもない」とされる．文部科学省の「大学設置基準（昭和31・10・22文部省令28）第36条5号」を参照すると，「大学は，校舎のほか，原則として体育館を備えるとともに，なるべく体育館以外のスポーツ施設及び講堂並びに寄宿舎，課外活動施設その他の厚生補導に関する施設を備えるものとする」と規定されている．いわゆる「運動部」の論拠となる指摘は，この一文を置いて他には見られない．

本稿では，前述のように「大学運動部」が，存立基盤の不安定なところに立脚することを前提とする．そのうえで，カーリング部を「ゼロ」から立ち上げた学生たちの，部活や練習の流れ，競技成績，部活への思い，練習における創意工夫など，4年間の動きを参与観察と聞き取り調査を中心に追い上げ，総括しようというのが第1の試みである．

第２に，地方におけるカーリング実践への着目である．現在，公益社団法人日本カーリング協会（以下，「日本カーリング協会」とする），北海道カーリング協会，JOC などを中心に，タレント発掘事業や，協会指定枠（指定強化選手）の拡大が行われている．しかしながら，筆者は競技スポーツとしての選手強化のみならず，地方で行われているローカルな実践にも注目すべきと考える．その理由として，大沼（2010）は，北見市常呂町のカーリングを「多様な町民が集まり，人びとのつながりの深さを見せてくれるのがカーリング場」であり，さらに「常呂町のカーリングを五輪にまで引き上げていった源泉は，こうした人びとのつながりを絶えず編んできたことなのでしょう．五輪選手の存在もこうした網の目の１つのように見えてきます．世界へとつながった常呂町のカーリングは，昔のままの社交空間をとどめています」という．大沼が指摘したように，常呂町のカーラー（＝カーリング選手）が強化された要因が「人びとのつながりを絶えず編んできたこと」であるとすれば，早期のタレント発掘，選手強化の集中は，地方のカーリング文化の衰退のみらず，日本のカーリング界の競技人口の減少，競技レベルの弱体化を招きかねないと推察される．ゆえに，中央で行われる選手強化や競技レベルとは一定の距離を置き，地方の実践の中に埋め込まれたカーリングと，「つながり」の中から選手強化を目論むのが，本稿の第２の試みである．

上述のような特徴をもつカーリングではあるが，現在，大学カーリング部を事例とし，教育学，社会学的な側面，さらにはプレイヤー経験をもつ研究者の視点から迫った実践研究は未だ刊行されていない．そのため，このカーリングが持つ多面的な可能性と部活動を連関させた実践研究には，一定の示唆を得られるものと推察される．また，１つの運動部を設立から俯瞰的に検討したもの，つまり誕生したばかりのカーリング部に加入した学生の学びや，その相互作用，地域の受容などを重層的，学際的にとらえたアプローチはほとんど見受けられない．

上記の関心を踏まえた筆者の問題意識は，以下の２つになる．第１に，カーリング部に参加している学生たちはどのような多面的な学びをしているのか．第２に，カーリングは稚内市の「まちづくり」のツールとして，どのような可能性が見られるのか，である．本稿では，これらの問題意識を踏まえながら，学生によるカーリング部の取り組みを単なる「スポーツ」の枠組みにとどまらず，学生，地域づくりなど多様な視点を取り入れた分析を試みる．

そこで本稿の目的は，稚内北星学園大学で設立された「カーリング部」の学生による部活動を事例に，立ち上げ当初から活動した学生たちの取り組みを俯瞰的に観察する．さらに，彼らによる「まちづくり」に向けた可能性を探ることとする．稚内市は，「スポーツ都市宣言」をし，2020 年５月には「新カーリング場」のオープンが予定されている．本稿において，カーリング未経験者たちによる４年間の動きを追い上げることは，今後の一般市民への普及，他地域への示唆など一定程度の意義があるものと推察される．さらに本稿から，「学生がどのように地域住民とともに学びを深めるのか」などの「教育的」な示唆も得られることが予想される．このように「誕生」からの過程を４年にわたり実践的に追い上げ，検証することは，今後の「スポーツ特待生」や，「スポーツ（カーリング）を通じたまち地域づくり」を考える上でのモデルケースの１つとなりえるものと推察される（写真2）．

なお，本稿で使用している写真は出典を明記していない限り，すべて筆者，または稚内北星学園大学カーリング部の撮影によるものである．

写真 2　第 10 回全日本大学対抗カーリング選手権大会の様子

（2019 年 11 月　どうぎんカーリングスタジアム（札幌市））

１．カーリングの普及，組織化にみる「ニュースポーツ」との類似性

カーリングは，長野オリンピック（1998）において五輪の正式種目となった．カーリングが多くのお茶の間で見られるようになった「きっかけ」ともいえる試合は，日本とアメリカによる「準決勝進出決定戦（男子）」が図らずも中継されたことに由来する．この時間帯，本来は五輪の花形競技の１つである「アルペンスキー」の中継が予定されていた．しかしながら，アルペンスキーが悪天候による順延のため，放送局は予定を変更してカーリングの中継を実施した．

その後も日本代表女子は毎回五輪に参加した．映画『シムソンズ』（佐藤祐市監督）のモデルとなった 2002 年のソルトレークシティー，マリリンこと本橋麻里選手が人気となった 2006 年のトリノなど，五輪を通してカーリングの認知度は徐々に高まっていった.その後のカーリング人気の高まりもあり，「日本カーリング選手権大会（現：全農日本カーリング選手権大会）」や，「オリンピック日本代表決定戦」などは，連日テレビ中継，ネット配信されるようになった．ここ数年では，「ロコ・ソラーレ」が 2016 年のカーリング世界選手権において準優勝，2018 年の平昌オリンピックで銅メダルを獲得するなど，その競技力は大きく向上し，日本のカーリングレベルは世界のトップグループにあるものと推察される．

１－１．カーリングの誕生から普及へ

カーリングは競技としてどのように成立し，日本で普及されてきたのか，以下では，「日本カーリング協会」のホームページをもとに参照する．ただし，同協会のホームページは，残念ながら文字化けや，誤謬が散見されるため，その部分には注釈を加えた．また文脈を踏まえても解読できない箇所（俗称「文字化け」）もあった [4]．

●カーリングの起源と発展

カーリングは，15 世紀～16 世紀にスコットランドもしくは北欧の国で始まったと言われ

ています.

…中略…

カーリングという名称の起源は定かでないですが, 1630 年のスコットランドの印刷物中にこの名称の使用が確認されています.

最初は，近所の人たちが集まって行うローカルなゲームでしたが，やがて異なる町，地域，国の間で対抗戦が始まりました．特にカナダに移り住んだ人たちが盛んにプレーするように簡り（なり），カナダでは国民的スポーツとなっていて，現在の公式ルールは主にカナダで確立したものへされています.

今では世界で 53 の国との地域が世界カーリング連盟(WCF)に所属しており(2013 年)，世界中でカーリングが楽しまれています．カナダ以外で盛んな国は，アメリカやイギリス，スウェーデンなどのヨーロッパ諸国で盛んなほか，日本，中国，韓国などアジア圏でも行われています.

●日本でのカーリングの普及

1950 年に中国の黒龍江省で, イギリスの将校からカーリングを習っている日本の軍人を描いた絵がアメリカのカーリング博物館で発見されました.

ただし，一般に日本でのカーリングの始まりと言われているのは 1936 年．ドイツで開催された冬季オリンピックに参加した選手団が，日本にストーンを持ち帰り，長野県の諏訪湖でデモンストレーションを行いました．彼・（彼ら）はクラブを設立し，大会を開ｴﾃ（開催）しました.

その後約 40 年のブランクを経た 1970 年代ま（ま，不要）後半に，カーリングは再び北海道で開始されました．日本におい（おいて）競技として定着させる礎となりました.

カーリングは，スコットランドに起源をもち，その後，競技として組織化，普及されていった．以下では，カーリングの誕生，そして普及の過程における注目点を２つあげる．

１－２－１．競技の組織化

上述の「日本カーリング協会」のホームページにもあるように，カーリングは，「最初は，近所の人たちが集まって行うローカルなゲームでしたが，やがて異なる町，地域，国の間で対抗戦が始まりました．特にカナダに移り住んだ人たちが盛んにプレーするように簡り」という記述である．このような系譜は，「近代スポーツ」の多くの発展形態と類似するものと考えられる．その一例として，公益財団法人日本サッカー協会のホームページを参照する．

イングランド（英国）では 12 世紀の文献があり，そこに当時のフットボールのことが記されていますが，イングランドのみならず，初期のフットボールは，街中や広場で興じられていた「ボール遊び」で，一つのボールを争って相手のゴールを目指すというものもあったようです.

上述したように，カーリングもサッカーも街中，近所で行われていたものが，徐々に制度化され，スポーツ競技として精緻化されていったことが伺える．この点において，カーリングも近代スポーツと類似する系譜に位置づけることができる．

１－２－２．カーリングの普及を阻むもの

2018 年 2 月 27 日には，サンスポに「カー娘効果！北見市，ふるさと納税返礼品にカーリング体験」という記事が掲載されている．北海道北見市が「ふるさと納税」の返礼品として「カーリング体験」を組み込んでおり，全国の納税者から好評であるとの報道がなされた．このことから，「カーリング」を実際にプレーしてみたいいうニーズは，一定程度見られる．しかしながら，我が国で，カーリングが「国民的なスポーツになっているか」と問われれば，首をかしげざるを得ない．サッカー，野球などのように全国的に普及，強化の進んでいるスポーツと比べ，カーリングはその裾野が十分に広がっているとは言い難い．特に「見るスポーツ」としての普及は，五輪のテレビ中継を通じて一定程度の広がりを見せてはいるものの，「するスポーツ」としての側面は十分ではないと考えられる．

カーリングの普及が思うように進まず，競技人口，競技レベルの偏在を生み出す要因の１つは，カーリングの「実施環境」に問題があると考えられる．「日本カーリング協会」のホームページ内の「全国のカーリングが出来る施設等一覧」を参照すると，国内に「カーリング専用施設」は，わずか 11 カ所しかなく，そのうち 8 カ所が北海道に偏在している．また 11 施設の中で「通年」利用可能なカーリング場は，道内に 3 か所，道外に 1 か所とその実施環境は極めて乏しい．2020 年 1 月 14 日から 16 日の 3 日間，北海道新聞の朝刊において「急伸道都のカーリング」という特集が組まれた．日本国内において，人口が集中する大都市にカーリング場があるのは札幌市のみである．そのため，利用者が殺到している昨今では，リンク予約状況が「飽和状態」にあるという．全国トップレベルの選手，ジュニアアスリートを輩出しているものの，その練習環境が充実しているとは言い難い．とはいえ，札幌市に第 2 のカーリング専用リンクを作るためには，数十億円（「どうぎんカーリングスタジアム」は総事業費 17 億円（北海道新聞 2020 年 1 月 16 日朝刊））が必要となる．さらには年間の維持費（アイスメイク）も数億円程度が相場とされ，建設コストとその維持費が自治体にとっては重荷となっている．

１－３．カーリングに見られる「ニュースポーツ」との類似性

第 2 に，日本で競技として定着したのが 1970 年後半と比較的「後発」なことである．このころ，日本のスポーツ史の文脈では，「ママさんバレー」を中心とした「コミュニティスポーツ」や，「ニュースポーツ」が誕生した時代と重なる．

「ニュースポーツ」は，仲野（2006）によると「競技力・体力・老若男女を問わず，あらゆる人々に開かれ親しみやすさを含んだ新しい概念のスポーツ」と述べている．また野々宮（1993）によると，ニュースポーツ誕生の仕組みは「①創造・開発・開拓・拡大によるもの，②コラージュ（貼り合わせ）によるもの，③ダウンサイジング（軽簿短小化）によるもの」であり，カーリングは，①の「創造，開発，開拓，拡大」に近い系譜であると推察される．

北海道では，これまでに芽室町のゲートボール（1947），大樹町のミニバレー（1972），幕別町のパー

クゴルフ（1983）など多くのニュースポーツが誕生してきた．このような背景には，地方の市町村における人口の減少，産業の停滞，過疎，高齢化など深刻な問題状況が現れ，とりわけ農村部においては，過疎化によるスポーツの担い手そのものの流出という厳しい現実があったからである(笹瀬，1992)．北海道におけるゲートボール，ミニバレー，パークゴルフなどのニュースポーツ創造は，「スポーツ振興の困難との背中合わせでの工夫」（笹瀬，1992）であり，大沼（1998）は「北海道における地域住民のスポーツ活動やその実践に着目することは，一定の意味がある」と述べた上で，北海道における地域スポーツ実践のユニークさを指摘した．

例えば北海道の大樹町で誕生したミニバレーは,「ママさんバレー」の指導の葛藤の中から誕生した．「ママさんバレー」を指導していた担当者が,次々に離脱していく主婦たちの姿を目の当たりにした．このまま「ママさんバレー」を普及していては，チームが組めなくなる．こうした土俵際で，担当者はビーチボールを用いたバレーボールを実施してみたところ，その不規則なボールの動きが面白く，主婦たちの間で評判となった．当時の生涯スポーツ振興が，人数，レベル，物理的な制約から困難であった北海道では，パークゴルフ，ミニバレー，ゲートボールなどのニュースポーツが誕生している．笹瀬（前掲書）は「北海道の大半を占める農村部において，地域と生活に根ざすという視点から見て注目される地道な活動やユニークで力強い実践が行なわれている」と述べている．

カーリングは，1500 年代にスコットランドで誕生した．それから長い時を経て，日本の各地域で行われていたカーリングの黎明期の実践形態としては，「地域と生活に根ざすという視点」から見ると，地道な活動やユニークで力強い実践であり，「スポーツ振興の困難との背中合わせのなかでの工夫」の１つであったと推察される．

１－４．北見市常呂町におけるカーリングの事例

カーリングが五輪種目として「競技スポーツ」の側面を持つことは，周知の事実である．特に「北見市常呂町」は，ロコ・ソラーレをはじめと，長野五輪に出場した敦賀氏，近江谷氏などの５名をはじめ，以降も多くのオリンピアンを輩出している．その輝かしい証は，北見市常呂町「アドヴィックス常呂カーリングホール」に常設展示されている（写真 3）．

写真３　五輪選手衣装の展示（アドヴィックス常呂カーリングホール内）

しかしながら，黎明期のカーリングは，前節で検討したような「ニュースポーツ」と類似する側面を持っていたと推察される．以下では，カーリングを体育社会学の視角から捉えた，大沼（前掲書）と東原（2019）の著書を参考に整理する．

常呂町におけるカーリングの始まりは，1980 年であった．全日本カーリング協会のホームページにも記載されていたように，北海道池田町で開催されたカーリングの講習会に 3 名の町民が参加したことに始まる．池田町や北海道は，カナダとの毎年実施されているスポーツ文化交流を通じて，「カーリング」に着目していた．この講習会には，カナダから世界チャンピオンが招かれた．常呂町からの参加者は，その後すぐさま町民に紹介し，翌年（1981 年）には，北海道で 2 番目となる協会を設立した．この協会設立に大きく寄与したひとりが，小栗氏であり，アドヴィックス常呂カーリングホール内には，「北見のカーリングを語るとき，カーリングの礎を築き，それを支えてきた人やチームを忘れることはできません」としてパネル展示がなされている．小栗氏は，本橋の著者『0 から 1 を作る～地元で見つけた，世界での勝ち方～』の中でも，度々登場し，北見市常呂町のカーリング界において，重要なキーパーソンであったことが推察される（写真 4）．

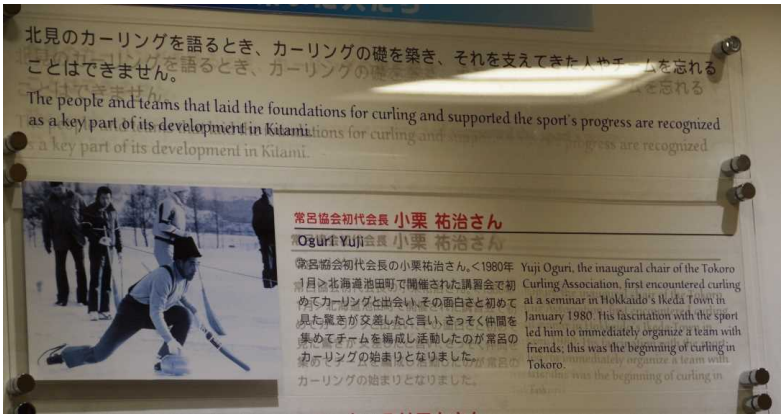

写真 4　小栗祐治氏の紹介パネル（アドヴィックス常呂カーリングホール内）

当時の北見市常呂町では，現在のような五輪競技とは程遠く，ビア樽，ほうき，漬物石，御影石などが使われ，「氷の上で漬物石を滑らせて，ほうきで掃除をしながら目的に運ぶ」風変りなスポーツといったものであり，競技施設，道具など独自の創意工夫の中で行われていた（写真 5）．

しかしこうした町民たちの創意工夫の中で誕生したカーリングは，町民同士の「ホットな社交空間」として，ナイトリーグが現在も開催されている．こうした住民の創意工夫によるスポーツ振興の姿は，前節でも引用した「スポーツ振興の困難との背中合わせでの工夫」（笹瀬，1992）であり，別海町のスケート文化を調査した前田（2006）がいう「住民の創造性」と類似するものと推察される．はじめにでも引用したように，大沼は「多様な町民が集まり，人びとのつながりの深さを見せてくれるのがカーリング場」であり，さらに「常呂町のカーリングを五輪にまで引き上げていった源泉は，こうした人びとのつながりを絶えず編んできたことなのでしょう．五輪選手の存在もこうした網の目の 1 つのように見えてきます．世界へとつながった常呂町のカーリングは，昔のままの社交空間をとどめています」と結論付けている．

カーリングのフロントランナーともいうべき北見市常呂町では，毎年多くの国際大会へ参加する選手を輩出している．その一方「社交空間」，「つながり」などのニュースポーツや，地域スポーツの文脈も垣間見ることができる．北見市常呂町の事例のように，カーリングは，日本に導入された「遅さ」の影響もあり，北海道で誕生した「ニュースポーツ」に多く見られる住民の交流的要素と，五輪で金メダルを目指す「競技スポーツ」の両側面を持つ「ユニークなスポーツ」の１つと言える．

北海道では，北海道カーリング協会のホームページにあるように（図 1），札幌などの都市部と同時に，帯広，稚内，南富良野，妹背牛，名寄．北見といった地方で行われていることも注目すべきポイントである．なお，今後は稚内市と北見市に新たな通年利用可能な「常設リンク」が開設される予定である（2020 年 2 月現在）．

写真 5　カーリング用具の変遷（アドヴィックス常呂カーリングホール内）

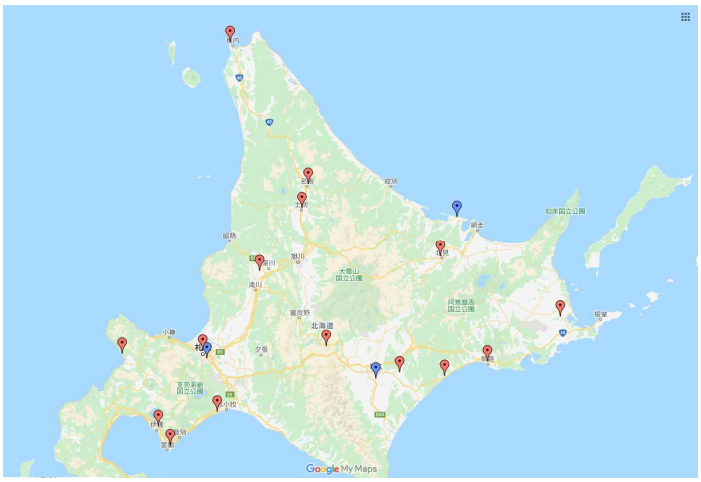

図 1　北海道のカーリング場一覧（北海道カーリング協会より引用）
青が常設リンク，赤が冬季限定（大半は 11 月～3 月の 5 ヶ月間営業）リンク

２．　稚内北星学園大学カーリング部の４年間の取り組み

稚内北星学園大学は，情報メディア学部情報メディア学科を有する１学部１学科制の大学である．近年の少子化，地域の過疎化の影響を受け学生の確保に苦労している．稚内北星学園大学では，2017 年度から「入学後も本学において競技を継続できる者」を「スポーツ特待生」として学生を募集することが理事会で決定された．なお，稚内北星学園大学の経営には，2020 年 4 月から京都の「学校法人育英館」による参画が予定されている（北海道新聞，2019 年 12 月 26 日朝刊）．

前章まで検討したように，カーリングは数多のオリンピアンを輩出している北海道においても，実施環境が恵まれているとは言えない．「五輪種目」であるが，前述のように「つながり」，「交流」という礎の上に構築されている「ユニーク」なスポーツである．本章ではカーリング部員たちの実践，記録，アンケート調査，インタビュー調査の結果を提示する．

以降では，「稚内北星学園大学カーリング部」を「カーリング部」とし，部に所属している学生たちを「部員」，稚内北星学園大学を「本学」として以下の論稿を進める．本章で引用する「語り」において，() では，前後の文脈を踏まえて，筆者による加筆を行っている．また，【】は語りにおいて固有名詞が登場したため，個人の特定，個人情報保護の観点から加筆・修正を行っている．≪≫はインタビューアーである筆者が会話中に質問をしている．なお，インタビューアーである筆者は，カーリング部の顧問であり，部員や職員らと近い関係性にある．そのため，部員の言葉遣いは若者言葉や，それがさらに砕けた表現が多くみられるが，語りのリアリティを再現するため，そのまま掲載している．

２－１．　設立メンバーと１年次（2017.2～2017.3）の活動内容

前述したように，本学では，2017 年 2 月 13 日に「カーリング部」が設立された．設立の理由は，本学の理事会決議によって，翌年度から「カーリング特待生」を利用した学生募集を開始するためであった．その受け皿としてカーリング未経験の１年生９名が集められ，カーリング部員となった．カーリングシューズ，ブラシ，ユニフォームなどは大学側から支給された．

「設立式」の式場で，来賓の稚内カーリング協会会長は，「稚内で行われているカーリング大会のノシャップ杯には，道内大学から多くのカーリング部が参加しています．カーリングは大学生に非常に人気の高いスポーツです．まずは大会を見に来ていただいて，カーリング大会の雰囲気を感じて欲しい」と部員を激励した．コーチは，「稚内北星学園大学カーリング部という歴史の１ページを部員の皆さんと一緒に築いていきたい．やるからには勝つための指導を行っていきたい」と抱負を述べていた．

下記の語りは，学生をリクルートし，設立に深くかかわった職員Ｚさんの語りである．

≪大学でカーリング部を設立すると聞いてどう思いましたか？≫

「カーリングかぁ」って感想であって，「カーリングができるのかなぁ？」，みんななら それに向けて「楽しくできるのかな？」っていう思いはあった．やる子がいるのかな，単純にね，思ったけれども，「ま，いっかな？」っていう気持ちが．「(声をかけた学生から) いいですよ」っていう返事が来たっていうのはちょっと意外な面でもあったけど，「あー やるんだ，できるんだ，やろうと思ってるんだ」っていうそういう思いはちょっと反面あったかな．「(カーリング）どう？」って聞いた本人だけども，反面，「あ，やるんだ」っ

ていう思いがあったかなー．私は「やるっていう子がいないかな？」と思ったから．（中学，高校の部活で）やってるわけじゃないし．

部員の募集を始めた職員Ｚさんも学生たちがカーリングに取り組もうとするのか，半信半疑だったことが読み取れる．このような経緯で本学の「カーリング部」は設立された．

表１は，「カーリング部」に加入した部員の中学，高校時代の部活，入部当時の役割である．全ての学生が１年生であった．また，９名中８名が運動部に所属していた経験を有する．吹奏楽部経験者のＥくんは，マネージャーである．数試合市内大会に出場したが，主に写真撮影，練習の工程管理などを行っていた．Ｇくん，Ｈくんは設立後１か月以内に，学内の別の活動に参加するため退部した．またＩくんは，部員としてカーリングシューズや，ユニフォームなどを作成したものの，ミーティング，部活動に一度も参加することなく翌年退部した．

結論を先取りするならば，４年間部員として在籍していたのは，Ｃくんと Ｄくんの２名であった．残りの７名は，市内大会に参加したものはいるものの，対外的な公式戦に一度も出場することなく退部した．また，事実上退部していたものもいた（俗にいう「幽霊部員」）が，顧問への正式な申告をもって，「退部」としている．

表１　設立時の部員のプロフィール

個人プロフィール						
部員	性別	中学校　部活動	高校　部活動	加入年	役　職	備　考
A	男	野球	野球	2017	部長（発起人）	
B	男	サッカー	サッカー	2017	発起人	
C	男	アイスホッケー	アイスホッケー	2017		４年間在籍
D	男	野球	卓球	2017	会計	４年間在籍
E	男	吹奏楽	吹奏楽	2017	マネージャー	
F	男	剣道	―	2017		
G	男	バスケットボール	―	2017		即退部
H	男	バスケットボール	―	2017		即退部
I	男	サッカー	サッカー	2017		参加実績ゼロ

2017年２月13日に設立されたため，実質的な１年次の活動期間は１か月半程度しかなかった．コーチによる指導を受け，氷上練習を２回ほど実施した（写真6）．２月末には，稚内市で「ノシャップ杯」という国内からの参加者も多数募る大会があり，コーチから「他大学からの参加者もあるので，見学へ来るように」との指示があった．実際は，都合のつかない学生が多く，見学に行った学生は，Ｆくんのみであった．

写真 6　カーリング場における練習風景（コーチによるデリバリーの指導）

２－２．　設立メンバーへのアンケート調査

2017 年 2 月 15 日に，本学「わくほくメディアラボ（ラーニングコモンズ）」において，部活の最初のミーティングを実施し，部活の目標や，部内のルールなどを確認した．同時に，カーリングをどのように認識しているか，部活での目標など 8 項目からなる質問紙を配布し，筆者立ち合いの下で回答してもらった．質問紙は 8 枚配布し，回収率は 100%であった．

２－２－１．カーリングの実施経験や視聴回数

本項では，カーリングの実施経験，カーリングの視聴回数の 2 つの結果を提示する（表 2）．

表 2　部員たちのカーリング経験

部員	性別	中学校　部活動	高校　部活動	カーリング経験	視聴回数
A	男	野球	野球	中，高校の体育授業	1 度見たかみてないか
B	男	サッカー	サッカー	中，高校の体育授業	1 度見たかみてないか
C	男	アイスホッケー	アイスホッケー	ない	2－3 回見た
D	男	野球	卓球	体育の授業，中学校	2－3 回見た
E	男	吹奏楽	吹奏楽	ない	2－3 回見た
F	男	剣道	—	ない	見たことがない
G	男	バスケットボール	—	ない	2－3 回見た
H	男	バスケットボール	—	ない	見たことがない

カーリングの実施経験は，3 名が「あり」と回答した．稚内市カーリング場の近くに位置する稚内市立稚内中学校では，「体育授業」の一環としてカーリングが授業科目に取り入れられている．また，稚内大谷高校においても同様にカーリングが授業で取り入れられている．3 名の部員も前述の中学校，高校の出身者であった．

カーリングの視聴回数について，多くの学生があまり視聴した経験を持っていない．現在では，NHKBS や，Youtube によるストリーミングなども可能であるが，当時はそのような環境がさほど充実していなかった．また，部員たちの自宅に BS 放送がなく，視聴環境が十分に整っていなかった可能性も否定できない．

２－２－２．カーリングのイメージや，部活の目標，期待

本項では，「カーリング部」への入部のきっかけ，目標，期待，カーリングのイメージなどを尋ねた結果を提示する（表 3）．

表 3　カーリング部への入部のきっかけ，目標，期待などのアンケート結果一覧

部　員	入部のきっかけ	部活での目標	カーリングのイメージ	部活における期待
A	大学の名前を広めていくため	勝てるチームを作る	大逆転	これから学生数が増えていくこと
B	友人からの誘いもあり，中学高校でカーリングを経験して楽しいと感じていたから	たくさんの大会に出場して，カーリングを純粋に楽しみたい	オリンピック	稚内北星学園大学の1つの特徴といえるくらいまでしっかりとした組織まで成長してほしい
C	単純にやってみたいと思ったから	楽しんで協議をやること	とても難しい	競技だけでなく，団体での活動という点で，何か得ることができたらと思います．
D	人数が足りないといわれ，楽しそうだなと思った部分もあったので入った	あまり経験のないカーリングを通して，ただスキルを上げるだけでなく，いろいろな観点でものを見られるようになりたい	女性が多く，北海道が強いイメージ	稚内のカーリングが活性化される可能性が上がること
E	友人からの誘いを受け，またカーリングにも多少の興味・関心があったため入部した	まず楽しく4人で協力して，練習・大会に臨みたい	ブラッシングが大変そう，頭脳性が多く見受けられる	部員数を多くし，チーム数を増やし，チームを強くする

F	友人からの勧誘があったから．自分も興味があったので，参加する気になった	自分にとって，まだ伸ばさなければならないと感じている協調性，団体行動をよりうまくしていくこと	氷上のボーリング	友人を作る，今後の他学年，大学との交友
G	ノリで誘われた	勝てるチーム	ストーンを中央に置くように工夫して競うスポーツ	楽しくできること
H	友人からの誘い	楽しみながらやる	石を滑らせて，サークルの中に置く	交流の場

前述の本学職員Ｚさんから声をかけられたＡくんを中心に設立されたため，「(友人から) 声をかけられた」，「誘われた」という声が圧倒的に多い．また，部活の目標では，「勝つこと」，「協力」，「楽しみたい」という声がみられた．

カーリングのイメージは，「氷の上」，「頭脳的」，「オリンピック」などのイメージが強く，具体的なスポーツとしてのイメージは漠然としている印象が推察された．

カーリングにおける期待は，「カーリング部」が「特待生制度」の受け皿となる目論見などもあったことから，学生募集や経営面に言及するもの，地域への波及，楽しむ，友人を作るなどの交流への期待も見られた．

２－３．　２年次 (2017.4～2018.3) のカーリング部

前述したように「カーリング部」が，事実上始動したのは部員が２年生となった冬からである．カーリングの強豪校やチームなどは，夏場も大会に招待されることが見られるものの，本学の「カーリング部」は無縁であった．「カーリング部」は，コーチ帯同のもと，2017 年９月に北海道帯広市において３日間の合宿を実施した (写真７)．

写真７　帯広合宿でスイープをしている様子

2 年次は，稚内市の 2 つのナイターリーグに参加した．リーグ戦は，11 月～12 月，1 月～3 月に開催され，どちらも 19 時に試合を開始する．市内の社会人，高齢者など 10 チーム前後が参加する．予選リーグの後，上位 4 チーム（2 リーグの場合は両リーグの 1 位，2 位チーム）による決勝トーナメントを実施する．この 2 つの大会は，「カーリング部」が設立されて以降，毎年欠かさず出場している．2 年目はどちらの大会も予選リーグ敗退であった（表 4）．部員たちの合宿，市内大会への参加状況は，表 5 のとおりである．

表 4　2 年次の「カーリング部」が参加した主要な大会

〇稚内市内大会（対一般）
・教育長杯カーリング大会：ナイターリーグ戦（週 1 程度）　11 月～12 月　…予選 R 敗退
・体育協会長杯カーリング大会：ナイターリーグ戦（週 1 程度）1 月～3 月　…予選 R 敗退

表 5　2017-18 年の活動状況

部　員	性別	2017-18 年		
		夏合宿参加	冬市内大会	備　考
A	男	〇	△	車
B	男	×	△	車
C	男	〇	◎	車
D	男	〇	◎	
E	男	〇	◎	車
F	男	〇	△	年度末に退部
G	男	退部済		
H	男	退部済		
I	男	×	×	年度末に退部
		〇参加 ×不参加	◎頻繁に出場 △たまに出場	車:車所有者

2 年次は，合宿以外の練習を夏場に実施していない．オフ期の走り込み，筋肉トレーニングなども一切実施していない．冬場は，週に 1 回，火曜日に練習を実施していた．2017 年度は，部員たちが集まって自主的に練習をするということは一切見られず，「顧問と決めたから」という半ば義務的に週 1 回の練習をしている状況であった．

練習も基本的には，試合形式の練習が中心であったが，E くんが他チームとの試合観戦中方法を学び，それを「カーリング部」で実践していた．その 1 つは，写真 8 のようにストップウォッチ（スマホ）を用いて，ストーンのデリバリーの際，「バックライン」と「ホグライン」間の秒数を図ることを実践した．E くんが実践しようとした練習は，カーリング界では通称「バック・ホグ」と呼ばれるタ

イム計測であった．選手たち日頃の練習から，「3.8（秒)」，「4.1（秒)」と，この「バック・ホグ」を設定タイム通りに通過するよう身体に刻み込んでいる．強豪チームともなると，スイーパーの２人は，このタイムで，ストーンの止まる位置が予測でき，スイープの有無の目安とされている．基本的に，顧問は学生たちの自主性に任せ，練習方法に大きく口出しをすることはなかった．

写真８　「バック・ホグ」のタイム計測をしている様子（右側の学生）

また，稚内市カーリング場は，大学から 11 キロ（車で 20 分）程度の距離に位置する．バスなどの公共交通機関は，大学付近を通るものが１時間に１本程度しかなく，カーリング場へ行くには，さらにもう１本バスの乗り継ぎが必要となる．さらに授業後の移動は，バスの時間が合わないことも多くみられた．そのため，車を所持している学生に依存しながら，練習や試合に参加せざるを得ない状況であった．

２－４．　２年次終了後のアンケート調査

「カーリング部」として２年目，実質的な１シーズンが終了した 2018 年２月８日に，調査への同意がとれた学生３名（B くん，C くん，D くん）へのグループインタビューを実施した．グループインタビューでは，「カーリングの楽しかったところ」，「1 年間を振り返ってみて」，「あと２年カーリングを続けたいか」などの半構造化インタビューを実施した．

２－４－１．　カーリングの楽しかったところ

本項では，「カーリングの楽しかったところや，魅力について尋ねた．B くんから順に以下の回答を得られた．

> *試合に出るときは結構面白ですけどね，みんなで頑張ってる感，そこまでいい雰囲気でやってんのかっていわれると，そんなんでもないですけど・・・意外とみんなまじめにやるんで，僕だけなんですよ，すごいふざけた感じでやってんの．僕以外しゃべんないすよ．*

ほとんど．意外とポジティブな言葉がない，ほんとに「ナイショ（ナイスショット）」の時しか，言わないですよ．僕は結構ミスっても励まそうかなっていう気持ちで，「ナイショ」とか言ってるんですけど，意外とみんなそこはブルーな感じで，あんまり言ってくれない．（Bくん）

たぶん最初みんな，何やるんだろうとか，面倒くさいとか，すごい思ってたとも思うんですけど，大会いくにつれて，練習いくにつれて，「あれ？カーリング楽しんじゃね？」みたいな，実は僕個人はすごい思ってて，最初「すごい面倒くさいなぁ」って感じでいってたんですけど，今だと次大会勝てるんじゃないかな，頑張るかなみたいなっていう感じで，まとめていうとカーリング自体を楽しんでやっているからだと思うんで，良かったというのも含めて，カーリング部に入ってよかったんじゃないかなという風に思っています．（Cくん）

やっぱり，合宿行ったときは「楽しかったかなぁ」って感じました．全員ではなかったけど，そういう風にみんなでカーリングに向かって，1 つのことに向かってやるっていうのはやっぱり楽しいなぁと思いました．【道内の大学のカーリング部顧問】の先生も教えてくれたんですけど，普通に滑るだけじゃなくて，印，コーンの間を通るとか，間を滑るっていうのがあったんで，ちょっとアトラクションっぽいというか，ちょっといつもと違う感じがして面白かったなぁと思いました．（Dくん）

この時点で，C くんのみは，「あれ？カーリング楽しんじゃね？」とすでに魅力を感じていたことが推察される．彼は氷上スポーツのアイスホッケーでは，全国大会出場クラスの腕をもつ．高校時代までに鍛えたアスリートとしての身体資本と，どちらの種目も「氷上で道具を用いる」という類似性が重なったものと推察される．

一方，B くんは，カーリングの固い雰囲気に馴染めなかった発言がみられる．コミュニケーションを楽しみたいBくんにとって，カーリングの堅苦しい雰囲気は相容れないものであったと推察される．

このように各部員の発言に注目すると，D くんは，「合宿は楽しかった」旨の発言をしているが，カーリングそのものに魅力や楽しさをどこまで感じているのか，不透明な発言であった．しかし，彼は部活動に 4 年間在籍した．

２－４－２．　カーリング部員として試合や練習をしてみて

本項では，カーリング部員として，試合や，練習を経験し，そこで何を感じたのか尋ねた．

（授業で体験した）中学高校のときは，そんなにルールとか教えてもらってなかったから，ただ擦って，真ん中に入れて落とすっていう競技だけかなって思ったんですけど・・・やってみたら，まー難しいんですよ．めちゃめちゃ．力の加減とか，コートの状況とか，今日滑りにくいとかも考えてるし，あとここに投げて相手のガードみたいなとかも，戦術

あるんだなみたいな・・・意外と幅の戦術の広さがあるんだというのは感じましたね.（Bくん）

単純に「すげー時間かかる競技だな」っていうのと,「すげー静かな競技だな」っていう2つですかね. アイスホッケーの場合だと, 時間に制限あって, オーバータイムとかもあるんですけど. 一応時間に制限あって「どれだけ声出していくか」っていうのが大事な競技なんで, それとは真逆というか, こんな繊細なことするためには, やっぱりそれなりの雰囲気と時間が必要なんだなっていう風に感じました.（Cくん）

「思った以上に考えるなぁ」っていうのがやっぱりあって,【Bくん】の言った通り, リンクの状況だったり, 相手のストーンの状況だったりとかっていうのを考えることが多いなぁと思いましたね. で, そこから自分がどうしたらいい, こうしたいう風に幅広くみるのが大変だわって思いました.（Dくん）

B, Dくんに共通しているのは,「戦術」や「考える」という点であった. 彼らの発言からも, カーリングは「氷上のチェス」と言われ, 作戦面, 組み立てが重要な競技であることが伺える. さらにCくんが言う「すごく繊細」というのもカーリングの特徴と考えられる. 特に,「ダブルテイクアウト」,「ヒットアンドロール」を狙う際には, ストーンに単に当てるだけではなく,「厚く」,「薄く」など数センチ単位での調整が必要である. ただし, 彼の試合が「すごく長い」という発言は, 少し注意が必要である. カーリングは, エンド数にもよるが, 地区大会レベルで実施される 8 エンドの試合では, 2 時間程度が一般的である（世界大会や全国大会では 10 エンドで実施される）. カーリングには,「シンキングタイム」があるため, 作戦を考えるための持ち時間は制限されている. 野球やテニスなど 2 時間を超える競技もスポーツにはあるため, C くんの発言は, 自身が経験してきたアイスホッケーとの比較の中で出てきた発言と考えられる.

２－４－３.　あと 2 年カーリングを続けていきたいですか？

本項では, カーリング部として実質的に 1 年間の流れを経験した部員に, あと 2 年間, すなわち「4 年生までカーリングを継続したいかどうか」を尋ねた.

正直なやつで言ったら, このメンバーがいるならやりたいなって, これからどんどん抜けていくならすぐやめるみたいな, いつでもやめる準備はできてますよ, みたいな感じですけど. そこまで練習もしてないじゃないですか, 仲間次第かなっていうのはあります.（Bくん）

カーリングという競技自体はこれからもやっていってもいいんじゃないかなと思ってるんですけど, やっぱり大学っていうのと関係（大学の学生募集の一環など経営サイドからの要求）してくるとちょっと考えなきゃいけないなっていう風に思っていて, 僕たちがずっと続けてて

部として成り立っていくのもいいんですけど，やっぱり後輩たちに新しく入ってきてもらってそのまま部として，稚内北星学園大学にカーリング部を残していくっていう活動も，ある程度必要なんじゃないかなっていう風に思っています．（C くん）

自分の中で迷っている部分っていうのがあって，このままカーリング楽しいから普通にやっていたいっていう気持ちもあるし，この楽しい気持ちのままで大学の（経費を）色々使ってやっちゃっていいのかっていう責任というか，プレッシャーも感じちゃっているので，どこかで引っかかっている部分があるのかなって思って，そこがうまい具合に色々と重なってひっかかっちゃうと，たぶん辞めるかなって思ってます．優先事項は低いよね．（D くん）

彼らの発言の中で，B くんや D くんの発言の中には，「辞める」というネガティブなものが登場する．文脈上，「辞める」ことを示唆しているとも，していないとも読めるが，このような発言がでてくることには，注意する必要がある．

また，B くんの「仲間次第」，「このメンバー」というのは，やや後ろ向きな発言であると推察される．このインタビューの時点で，来年度「特待生」として，全国大会出場経験のある生徒の加入が内定していた．経験者という「新しい血」が入って，競技力を高めてくというよりも，B くんは仲間づきあいの延長に「カーリング部」が位置していたことが伺える．

C，D くんの発言に見られる「大学」サイド，すなわち経営サイドの目を気にしている発言は，「カーリング部」の良くも悪くも独特な点である．前述したように，本学の「カーリング部」は，理事会サイドの要求で設立されており，学生側の主体的な要求によるものではなかった．このあたりの「クラブ」としての根幹的な部分が，一般的な部活動と異なっていることが伺える発言であると推察される．

２－４－４．　地域の人とのかかわりとかつながり

本項では，試合中や，家族と「カーリング」を通じた会話，印象に残った言葉などを尋ねた．

ほぼないですけど，バイト先でバイトの休み取るときに，「カーリング部の試合があるんで」って言ったら，「え？カーリングやってんの？」とカーリング部の存在を知ってもらえたっていうだけですね．それ以外ないかもしれない．「親はカーリングやってんの？」っていうぐらいですけど，試合行くって言ったら，「まぁ頑張ってね」みたいな．（B くん）

今のところ，そこは大きな変化ないのかなーっていうのは，ただ【地元】帰った時にカーリング部入ってるよって言うとめちゃくちゃ驚かれるっていうのはありますけど・・・元々アイスホッケーやってて，そっち関連のことやってると思われてるので，コーチ的な感じで．実際稚内来たらホッケーないし，スケートっていう文化ないし，「カーリングやってるよ」って言ったら，カーリング？みたいな感じですかね．（C くん）

バイト先の店長に行ったときに，最初は「え？，カーリング」って言われるんすけど，何回か「カーリングで休みます」って言ったら，「あーいいよ，頑張って」っていう風に変わってくれたのはすごくうれしいな，理解してもらえたのはすごくいいかな．親もカーリングのこといったら，今日カーリングの試合だったって言ったら，毎回結果とか聞いてくれるんで，そういう風に聞いてくれるのはすごくうれしいなと思います．試合中は結構言っていただいているので，ご指摘をいただくので，昨日とか試合あって，スイープしてるときに，「頑張れ！頑張れ！」って言ってくれるのは本当に，うれしいですね．一緒に「あー」って言ってくれるよね．リアルな試合だと，めちゃガチなわけでしょ，「YES」と「Whoa」しか聞こえない．そう考えると稚内の狭い地域の試合だからっていうのはあるかもしれませんね（Dくん）

彼らの発言を通じて面白いのは，多くの人が「えっ，カーリング？」という趣旨の発言をされていることである．ここに「カーリング」がサッカー，野球などのようなメジャースポーツではないことが読み取れる．また，カーリングは，環境や，北海道で始められた時代が比較的後発であるという制約もあり，部員の周りにいる保護者や周りの社会人も，前提となる知識があまりなく，文脈を共有できないものと推察される．

同時に，D くんの発言に見ら得るように，「狭い地域」ならではの交流も見られる．稚内市内のナイターリーグには，10 代，20 代前半の選手はほとんど見られない．さらに稚内市には大学が 1 つしかなく，地域の方々から部員たちは「学生」として温かい目で見られている．そのため，地域の方から「教えていただく」ような場面が数多くみられたと推察される．.

２－５．　3 年次（2018.4～2019.3）のカーリング部

「カーリング部」が本格的な対外試合への出場を開始したのは，部員が 3 年生となった夏からであった．2018 年 4 月には，1 年生が 6 名加入した．その中の 1 人は，「特待生」としてカーリングの全国大会出場経験のある学生であった．2018 年 7 月に帯広市において 2 日間，9 月に北見市常呂町にて合宿を実施した．

3 年次は，前年度に引き続き稚内市の 2 つのナイターリーグに参加した．教育長杯は予選敗退であったが，体育協会長杯は 3 位であった．また，新たに「市民カーリング大会」や「富田杯」にも出場した．2019 年 3 月に開催された「富田杯」では初出場ながら見事に優勝した．さらに，稚内市で国内の 23 チームが参加して開催された「ノシャップ杯」では，地元勢として 10 数年ぶりとなる決勝進出を果たした（結果は準優勝）．

3 年次からは，対外試合も増加した．2018 年 7 月には大学生相手の「ユニバーシアード冬季競技大会日本代表選考会」や，「全日本大学対抗カーリング選手権大会」に参加した．さらに 12 月に開催された，一般，社会人相手の「北海道カーリング選手権兼アルバータ杯カーリング大会稚内予選」に参加し，上位 2 チームに入ったため名寄で開催された「北海道カーリング選手権兼アルバータ杯カーリング大会道北予選」にも参加した（結果は予選 R 敗退）．以上の結果は，下記表 6 にまとめている．また，

部員たちの合宿，市内大会への参加状況は，表７のとおりである．

表６　「カーリング部」の参加した主要な大会（個人参加を除く）

〇稚内市内大会（対一般）

・教育長杯カーリング大会：ナイターリーグ戦（週１程度）　11 月～12 月　…予選Ｒ敗退
・体育協会長杯カーリング大会：ナイターリーグ戦（週１程度）１月～３月　…3 位
・市民カーリング大会：即席チームによるトーナメント（半日）１月
・富田杯：リーグ戦の後，決勝トーナメント（１日）３月　…優勝
・ノシャップ杯：全道を中心に選手が参加，リーグ戦の後トーナメント（2 日間）…準優勝

〇対学生試合

・ユニバーシアード冬季競技大会日本代表選考会（2 日間）…初戦敗退
・全日本大学対抗カーリング選手権大会（3 日間）…予選Ｒ敗退

〇対外試合（対一般）

・北海道カーリング選手権兼アルバータ杯カーリング大会　稚内予選（全日）…2 位
道北予選（2 日間）…予選Ｒ敗退

表７　2018-2019 年の活動状況

部　員	性別	2018-19 年				備考
		７月合宿	７月大会	冬市内大会	冬遠征試合	
A	男	×	×	×	×	年度末退部
B	男	×	×	×	×	年度末退部
C	男	〇	〇	〇	◎	車
D	男	〇	〇	◎	◎	
E	男	〇	×	×	×	年度末退部
F	男	退部				
G	男	退部				
H	男	退部				
I	男	退部				

〇参加　◎頻繁に出場
×不参加　〇出場あり　車:車所有者
×不参加

この年度は，夏場の全体練習として球技を中心としたスポーツを実施していた．走り込み，筋肉トレーニングなども一部実施していた．冬場は，週に１回，火曜日に顧問とともに練習を実施していた．

Dくんは球技などの練習や市内の大会にもほぼすべて参加していたが，Cくんはほとんど練習に参加していなかった．また市内大会もアルバイトが忙しく，欠場することが多かった．

これまで部員たちは，大学から支給された「ブラシ」を使用していたが，パッドのサイズや，持ちにくさから不満を抱えている学生も少なくなかった．年度末には，1本2万円程度のブラシを「自費購入」でも良いので購入したいとDくんが発言するようになった．このころから，カーリングのシューズ，ブラシなどの話題が部内で出るようになってきた[6]．結局，部員たちは検討を重ね，翌年度新しいブラシを購入した．

２－６．　４年次（2019.4～2020.3）のカーリング部

3年次の「カーリング部」は，特待生の加入により，練習方法，戦術，質ともに大きく変化したことで，大きな飛躍をもたらした．2019年（4年目）は，1年生が男子1名，女子1名が「特待生」として加入した．2人ともカーリングの全国大会出場経験のある学生であった．また女子学生は，スイスや韓国で開催された国際大会の参加経験を持ち，作戦を組み立てる「スキップ」としての能力に長けていた．

4年次は，2019年7月に北見市常呂町にて合宿を実施した．前年度に引き続き稚内市の2つのナイターリーグに参加した．教育長杯は部員数が増えたこともあり，2チーム体制で出場した．どちらも予選リーグを1位通過し，決勝で同士討ちとなり，優勝と準優勝を分け合った．体育協会長杯は現在開催中である．また，「市民カーリング大会」には6名の学生が，「富田杯」には2チームが出場した．「富田杯」では見事に優勝，準優勝という結果を残した．

また，女子部員が加入したことで対外試合もさらに増加した．2018年7月には男女混合で戦う「ミックスカーリング選手権大会（ミックスフォー，男女混合）」や，2020年1月には，「北海道ミックスダブルス選手権大会道北予選」に参加した．昨年に引き続き，大学生相手の「全日本大学対抗カーリング選手権大会」，一般，社会人相手の「北海道カーリング選手権兼アルバータ杯カーリング大会稚内予選」，「北海道カーリング選手権兼アルバータ杯カーリング大会道北予選」にも参加した（表8）．

部員たちの合宿，市内大会への参加状況は，表9のとおりである．この年度は，夏場の全体練習として球技を中心としたスポーツ，走り込み，筋肉トレーニングなども実施していた．本格的な筋肉トレーニングやバランストレーニング（通称「ガチトレ」）も週に1回取り入れた（写真9）．さらには顧問によるスポーツ栄養，運動生理学の講習会も実施した．また，大会には，特待生の2人が帯同し，パソコンを使用したデータ分析（写真10）や，試合後の反省会（写真11）などを自主的に実施するようになった．

冬場は，練習回数を週3回に増やした．Dくんは，ほぼすべての練習，試合に参加していた．Cくんは就職活動，教育実習などで予定が合わず，夏場の練習にはほとんど参加していなかった．上記の活動が一段落した冬場は，市内大会，遠征試合にほぼすべて参加していた．

表８　「カーリング部」の参加した主要な大会（個人参加を除く）

○稚内市内大会（対一般）

・教育長杯カーリング大会：ナイターリーグ戦（週１程度）　11 月～12 月　…1 位，2 位

・体育協会長杯カーリング大会：ナイターリーグ戦（週１程度）１月～3 月　…開催中

・市民カーリング大会：即席チームによるトーナメント（半日）１月

・富田杯：リーグ戦の後，決勝トーナメント（1 日）２月　…優勝，準優勝

○対学生試合

・全日本大学対抗カーリング選手権大会（3 日間）…予選 R 敗退

○対外試合（対一般）

・北海道カーリング選手権兼アルバータ杯カーリング大会　稚内予選（2 日間）…2 位
道北予選（2 日間）…2 位

・ミックスカーリング選手権大会（ミックスフォー）北海道予選　…予選敗退

・北海道ミックスダブルス選手権大会　道北予選（2 日間）…予選敗退

表９　2019-2020 年度の活動状況

部　員	性別	オフトレ	7 月合宿	7 月大会	冬市内大会	冬遠征試合	備考
A	男	退部					
B	男	退部					
C	男	×	○	×	◎	◎	車
D	男	○	○	○	◎	◎	車
E	男	退部					
F	男	退部					
G	男	退部					
H	男	退部					
I	男	退部					

車:車所有者

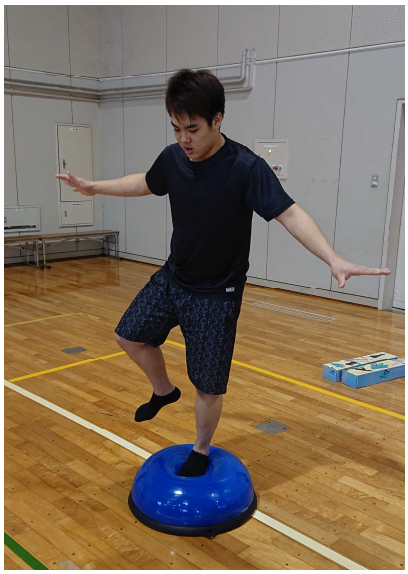

写真 9　オフ期にバランストレーニングを実施している様子

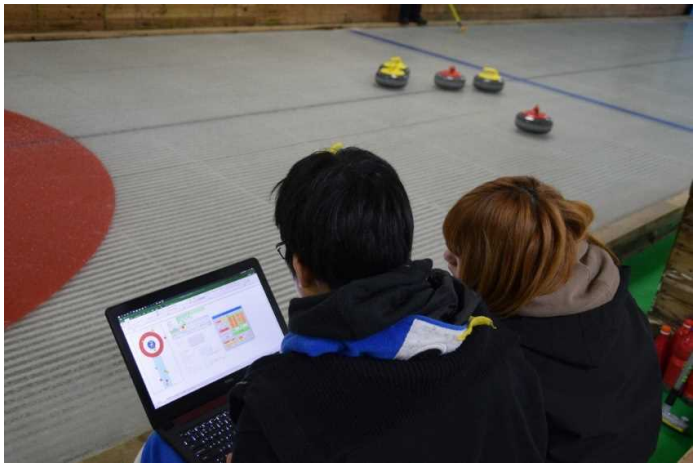

写真 10　試合中パソコンを使用して，ストーンの配置，ショット率などのデータ収集

写真 11　パソコンと特待生（女子）を交えての反省会の様子

２－７．　卒業年次の聞き取り調査

最終的に 4 年間カーリング部に在籍したのは，C くんと D くんであった．彼らがカーリングという競技をどのように感じていたのか，4 年間を振り返ってみての感想など半構造化インタビューを行った．調査は，2020 年 1 月 17 日にグループインタビューを実施した．

２－７－１．　4 年間続けてみての感想

はじめに，「4 年間を振り返ってみて」の感想を尋ねた．その語りをいかに提示する．

> *僕はすごい楽しかったっすね．カーリングに出会えて良かったって思うし，何なら卒業した後も，社会人のチームで続けていきたいっていうぐらいになったんで．（C くん）*

> *僕も楽しかったですね．楽しくて，より大学生活が豊かになったような感じがしましたね．教職だけじゃなくて，年々やっぱりカーリングに対する意識は変わってって，なんていうのかな，より選手として力をつけていきたいって年々，思ってって，特に今年はよりカーリングに力入れた年だったから，より濃い一年だったかなって思ってます．（D くん）*

2 人の部員から異口同音に，「楽しかった」という発言がみられた．そこで，「カーリング部」の活動の中でどのようことに「楽しさ」を感じたのか，質問した．

> *そうっすねー．単純に試合に勝てたのかなぁって，それが楽しさにつながるんじゃないかなって思うけど，最初始めた時って全然勝てなかったじゃないですか，それで行くのめんどくさいなって気持ちになってたけど，今は自分たちで勝てるようになってきたから，楽しいのかなっていう風に感じているんだと思います．（C くん）*

> *C くんと似てくるな，確かに最初のころ単純に氷の上で滑って，ストーン投げるっていうこと自体が楽しかったんですけど，今はどっちかっていうと自分のやりたいショットを自分の思ったところに投げれる，投げて思ったとおりの結果にするっていう楽しさ，そういうのを感じて，カーリングの競技としてはそういうところが楽しかったり，単純に部員が来て，来るか来ないかわからない状況でも新しく入ってきた人たちがいて，その人たちとも楽しく，遠征とか話したり，遊んだりするのが楽しかったなっていう風に思いました．（D くん）*

ここで注目すべきは，試合で「勝つことが楽しい」というスポーツの普遍的な感想がみられる点である．前章でカーリングの「ニュースポーツ」的な側面についても言及したが，競技スポーツとしての一面も強く残っていることが推察される．さらに D くんの発言は，興味ぶかく「最初のころ」と「現在」では，カーリングの「楽しさ」の質的な変化がみられる．はじめは氷上でストーンを投げる行為を楽しいと感じていたが，現在は思い通りに投げ，その結果を気にする段階へと到達している．

２―７―２．　これまで経験したスポーツとの違い

前項で見たように，カーリングにも「勝利」という競技スポーツに普遍的な部分がみられた．先にも指摘したようにカーリングは,「ターゲット型」に分類されるが,「チームスポーツ」の形態をとる．そこで，これまで自身が経験してきたスポーツとどのように違うと感じたのか，質問した．

> *（これまで経験してきたスポーツとは）独立しているのかなぁと，ルール，試合，カーリングっていうスポーツに対する心意気というか，それは他のスポーツにないのかなっていう，リンク上だったらルールもそうだけど，紳士的なスポーツっていう意味付けで，僕はアイスホッケーしかやってこなかったけど，少なくともホッケーにはなかったから．他のスポーツ，今まで学校の授業とか，体育とはまた違うのかなっていう，「カーリングでしかないんじゃないかな」っていう独特の感じ，他のチームとのつながりとか，っていうのは感じましたね．（C くん）*

> *他の競技ってのは，より高いレベルになればなるほど，それを 1 つにして，プロ野球選手だったら，野球を軸にして生活してくとかってなるのが多いですけど，カーリングのトップ選手って，1 年中カーリングしてる人ってごく少数で，カナダの人とかだって「カーリングは人生を豊かにするだけ」であってっていう，そういう考え方があって，そう考えるとカーリングって，普通のスポーツじゃないというか，ただ勝ちだけを求めるスポーツじゃなくて，自分を成長させるというか，自分の良くしようとか，良く生きようっていうところに重点があんのかなーって思いながら，最近は考えてたりするんですけど．（D くん）*

C くんがいうように「カーリングでしかないんじゃないかな」という言葉に，カーリングの特徴がよく現れているように推察される．カーリングは，ターゲット型では珍しい「チームスポーツ」である．従来のチームスポーツは，野球，サッカー，バレーボールなどの投打型，ゴール型，ネット型に分類されるものが多かった．カーリングは，敵（相手）からの侵入を受けない点や，デリバリー時にボールは投球側のチームがリンクを占有しているなど,他のスポーツとは異なる点が多数見受けられる．このため，ミックスダブルス，ミックスフォー，異年齢交流などが容易くなっているものと推察される．

また，競技人口が少ないこともあり，我が国では「カーリング競技」のみで生計を維持している選手は極めて少ない．日本ではプロ選手も存在しない．その結果,「カーラー同士」のつながりや,「生活の一部」,「ただ勝ちを求めるだけではない」という交流的な考え方も生じるものと推察される．特に大学生が集まる大会では,「どこか緊張感がない」と指摘する観客もいるほど，カーリング場の待合スペースは，談笑しているカーラーがとても多く散見される．

２－７－３．　4 年間部活を継続できた理由

本項では，前節 2－4－3 において，退部を示唆し，さらに C くんも D くんも 4 年時は「就職活動

や，教育実習があるから」という理由から３年次末での退部を希望していた．彼らがいかにして退部を思い留まったのか，について尋ねた．

１回目は【特待生の代】が入ってくるから，とりあえず「僕らいなきゃいけないんじゃね？」っていう，設立した当初の部員だし，「いなきゃいけないんじゃね？」っていうので，まず最初は回避できて，次２回目来たときは，意外にも残り１年だったら「やってもいいじゃね？」ってなって，「やるべきなんじゃね？」ってなって．僕の中でですけど．だからシーズン始まる前に僕もブラシかったし，最後の１年だからっていうのも含めて，辞めなかった理由はそこですかね．高校の時の部活とはやっぱ違って，高校の部活は「すげー辛い」っていう記憶しかないけど，カーリングはそんなことなかったなぁ．（C くん）

カーリングに触れて，よりカーリングの奥深さ，っていうのを知っちゃったから，辞め（ようと検討している）るときに【特待生】が来て１つのカーリングの深さを知って，3年の終わりとかに自分がゲームを組み立てってくってところで，より深さを感じて，そこの深さにハマっちゃったのかなって思って，そこですかね．カーリングの奥深さっていうのを強く感じてたのかなって思って，それで抜けられなくなっちゃったのかなって思ってます．≪深さ，奥深さとは？：筆者≫単純に氷の上をすべるだけじゃなくて，その日の天気とか，気温とか，リンクの温度，湿度，あとは自分自身のモチベーションだとか，会場にある石の重さとか，軽さとか，曲がり具合っていうところが，どれも統一されてないから，どこ行ってもいつでも．だからそれに毎回合わせて，考えて，対応してくってところにカーリングの楽しさってあるのかなって思ってます．深さはそういう要素がいっぱいあるのかなって思って．今思うと，カーリングの勉強は本当にしたと思う，いろんな試合見て…，カーリングの試合見るのすごく楽しくて，今もよく見たり，今も全然暇あったらスマホでみて．（D くん）

第 1 の注目点は，両者の発言に見られるように，「特待生」の存在である．前述したように特待生で本学に入学した学生は，3 名とも全国大会出場経験のあるものであった．C くんは彼が試合に出られなくならないようにという義務感から，D くんは彼からカーリングの「深さ」を知ったという．特待生は部活の練習メニューの考案，戦術の教授など，彼が既存の部員へと果たした教育的役割はとても大きい．そこから D くんのように自発的にカーリングの学習を深め，4 年次はほぼすべての部活に参加していた．C くんと D くんの退部を食い止めた，またカーリングの楽しさを知った要因として，特待生の存在はとても大きいものと推察される．

２－７－４．　今後のカーリングとのかかわり方

本項では，彼らに今後カーリングとどのようにかかわるのか，その点を尋ねた．なお， C くんも D くんも教員志望の学生であったが，最終的な進路はともに団体職員となる予定である．

職業柄あんまり関わることはないと思うんですけど，スポーツとして僕の中ではアイスホッケーかカーリングのどっちかなんですよね．夏は（職場の付き合いで）野球やらされると思うんで，冬のスポーツとしてどっちかかなっていう位置づけかな．今のところは．もし【地元】いって当てがあれば・・・ホッケーは道具が揃っちゃってるから，どっちもできちゃう．誘いがあったら全然やるし，両方ともなかったら，わりとハードルの低いカーリングを探すのかな，もしかしたらっていうくらいの位置づけですね．どっちかはやりたいです．冬の競技はやっぱり今までやってたし．（C くん）

≪先生になるのでは？：筆者≫教育実習終わってすぐは楽しかった思いが強かったんですけど，今になって思い返すと，意外と教育実習中のストレスすごかったなって思って．感じてはいなかったんですけど，身体中が肌荒れとか，ほんとすごくて，それだけストレス感じてたのかなって思って，そう考えるとその職業，そういうところで1年間とか働くのは自分の身体が持たなくなりそうって思って．あと（カーリングの）シーズンに入って，カーリングに触れる時間とか，大会に出る時間が増えて，それもあって．大会でやっぱり他の大学とやって自分で考えてる作戦が，意外と通用するなっていう部分もあって，そこで教師よりもカーリングの思いが戻ってきましたね．≪今後カーリングとどうかかわりますか？：筆者≫カーリングに携わって，（カーリング関連の）就職も決まって，これからはカーリングほぼ一筋になるんで，これからは資格とか，カーリングの資格がいっぱいあるから取ってて，さらには選手としてもトップレベルに入っていきたいと思っているから，よりカーリングに触れる時間とか増えるんで，どう関わっていくかっていうところでってなると…（これからのカーリングは，）ある種生活のためでもあるし，趣味でもあるし，夢にもなるし．．．ってなると，１つの人生の中の一部分というか，生きてく中のものになっていくのかなっていう感じになりますね．

C くんは，本学の立地する稚内から，車で 9 時間近い【地元】で就職するため，今のメンバーと関わることは少ない．先にも述べたようにアイスホッケーの全国大会出場選手であったため，今でもそこへの愛着は強い．しかしながら，彼の選択肢の１つに「カーリングを続けていく」ことも含まれ，来年度以降の大会参加も部員たちと確約している様子も見受けられた．D くんは，カーリング関係の就職が内定している．彼は，前節 2－4 で実施した 2 年前の調査では，「たぶん辞めるかなって思ってます．優先事項は低いよね」と述べていた．D くんにとっては，前項の特待生の存在や，自身が「カーリング」に内在する魅力に気づき，カーリング継続への熱意が大いに高まっている様子が伺える．

２－７－５．　カーリングを通じた地域の人たちとのかかわり

本項では，「カーリング部」の活動を通じて，どの程度人脈や，つながり，さらにはカーリング部としての活動を始めてからの家族との関係についても尋ねた．なお，C くんは一人暮らし，D くんは実家生である．

僕は積極的に声かけるとかそういうことできる人間じゃないんで，それができてれば広がってたんじゃないかなと，今べつに広がってないっていうわけじゃないんですけど，ちょっとだけ広がったかなっていう．（C くん）

（人脈は）広がったわ…．同じ世代の人たちとか，全日本選手権に出てる人たちとかと話したりは，大会であったり話したりとかあったから，確かに広がってるとは思います．普通に楽しい，しゃべってて，【他大学の学生のこと】しかでてこないw．これからももっと広げていきたいとは思っているので，僕のカーリング人生の中でもっともっと広げていきたいなっていう．あと，俺は年々親も興味示してきてたな．稚内の大会は特に【地元新聞】とかに乗ったりするから，「試合いつあんの？」みたいな話になって，今日はないけど，明日あるとかいう話になって，帰ったら試合どうだったのとか，大会どうだったとかいうのは結構．僕からは言わないですけど，聞いてきたりはしますね．（D くん）

この中で象徴的ものは，D くんの「人脈の中で僕の就職が決まったようなものですので」という点である．社会学者グラノベッターの「弱い紐帯」ではないが，「カーリング部」の活動を通じて，図らずも就職が決定した．彼の人生にとって「カーリング」が人生の一部分となりつつあることを如実に語るエピソードである．

２－８．　退部した 2 名への聞き取り調査

本項では，2 年次で事実上「カーリング部」としての活動を辞めた A くん，B くんにその退部理由などを尋ねた．この 2 人は，前述の職員 Z さんから声を掛けられ，部員募集に奔走した学生であり，初代の部長，副部長であった．まず初めに，4 年間部活を継続した C くん，D くんにどのような感想を持っているのかを尋ねた．

たぶん，「好きだから続いたのかなー」，俺の場合は何かカーリングって言われた瞬間からあんまり乗り気じゃなかったって言うか，カーリングかぁって感じだったんで，たぶんその二人は何かやるなら楽しんでる，一番楽しんでるんじゃないかな．俺らとの違いはそういうところかな．ほんとね．俺ら，マジいやいや過ぎたもんね．（A くん）

普通にすごいかな，大学で作った側っていうか，【A くん】が誘われてっていうか，【職員 Z さん】に作ってって言われて作った側だけど，初期メンツとしてやってて．その 2 人普通に最初からセンスあるような，ちょっとカーリングセンスあるような感じだったから，そこからカーリング楽しさ知っていって，大学で 1 個新しい試みができてるのはすごいいいところかなと思う．（B くん）

上述の A くんの語りの中にもみられるように，カーリングは，多くの人がマイナースポーツとして考え，「カーリングかぁ」と一歩下がって捉えられることも少なくない．本章で紹介した語りにおいて

もＡくんや，職員Ｚさんが同様の発言をしていた．そこで，「なぜカーリングかぁ」となるのかについて，両者に尋ねた．

> *俺に合ってないっていうか，自分が【別のスポーツ】をやりたいと思ってる時期ってのもあるけど，それ以外だったらフットサルとかだったらカーリングよりはもっとやる気出たかかなぁ，なんでカーリングなのかなぁってちょっと思ったってのかな，何て言えばいいのかな，その気持ちが乗らないっていうか，情熱的にならないっていうか，合うスポーツと合わないスポーツで，「合わないスポーツだった」っていうだけかなと思います．根本的に，最初にカーリングって聞いたときに，「カーリングかぁ」って思う人は楽しいと思えない．けど，このあんまりやりたくないと思ってたけど，楽しいと思った瞬間は（試合で）勝ったときかな．なんだかんだやりたくなくても，勝ったら気持ちいいな．逆に練習してないやつが，勝ったら面白いなっていう．やる気無いなりの楽しさ．楽しい人は単純にＤくんとかＣくんみたいな，好きで楽しんやってるみたいな人がホントの楽しさだと思うんだけど，カーリングを好きでいるみたいな…（Ａくん）*

> *【職員 Ｚ さん】に言われたときは，「あーカーリングかぁ」って確かに自分も思いました．なんで思ったのかは，やったことないって言っちゃあれですけど，授業とかでサラッとやってるけど，ホントのど素人が急にガチガチでやってくから，試合とかとかも組み込んでくから，カーリング部作っていったら，不安じゃないですか．めっちゃド素人が．結構カーリング（人口が）稚内いるじゃないですか，そん中に放り込まれるのかと思って…．仲間内で楽しんでいこうとは言ってたけども，「ちょっとなぁ」みたいな．結局試合だし，真面目にやんなきゃいけないじゃないですか，試合になるとふざけてるわけにもいかないじゃないですか，仲間内でどうにかなるっていうわけでもないし，相手にもスポーツマンシップっていうか，そのちゃんとやらなきゃいけないし，いろんな不安があったから，カーリングかぁってなって…．*

上述の 2 人の発言から，「不安」，「合わないスポーツ」であったという点に注目したい．これらはどちらも顧問やコーチなどの指導者側が，学生に「カーリングの魅力」を十分に伝えきれず，彼らの不安を楽しみに変えるような指導ができなかったという点で反省すべきところである．「合わない」と感じていた学生や，嫌々活動している学生に，「いいから続けてみなさい，続けていると楽しくなるから」というような信念，希望を導き出すような指導も不十分であったと推察される．同時に，大学側の要請もあり，カーリングや試合に慣れる前から大会に出場しなければならないなど，初心者の彼らに設定したハードルが高かった点は否めない．彼らが少しずつステップアップする段階を構築せず，いきなり試合に出場したことは，彼らの不安，パニックを誘発した．さらに前述したようにリンクが冬季の半年間に制約される環境面の問題も大きく，より一層彼らの不安を増大させたように推察される．一方繰り返しになるが，大学側の学生募集，宣伝の一環としてのカーリングの側面についても無視することはできない．指導者側は，この学生と大学側の微妙な緊張関係を上手くコントロール出来

たとは言えず，理事会主導の「カーリング部」の１つの難しさに直面したものと推察される．

おわりに

本稿は，本学で設立された「カーリング部」の学生による部活動を事例に，立ち上げ当初から活動した学生たちの取り組みを俯瞰的に観察する．さらに，彼らによる「まちづくり」に向けた可能性を探ることを目的としていた．

本学カーリング部の俯瞰的な観察は，第２章で詳細に提示した．本学では「カーリング特待生」を利用した学生募集を開始するための受け皿として，図らずもカーリング未経験の１年生９名が集められ「カーリング部」は誕生した．「カーリングをしたい，やってみたい」という学生側からの主体的な希望は一切なく，大学側からの要請によって誕生した極めて珍しい部活として産声をあげた．第２章で見たように，カーリング部の部員たちは，様々な紆余曲折を経ながら，時には退部者も出しながら「部」として形作られた．以下では，本稿における筆者の総括を３点ほど提示したい．

第１に，本学「カーリング部」における学びの成果についてである．本学カーリング部は，当初負け続きだった市内大会において，現在では「向かうところ敵なし」となっている．地元の愛好者からは，「大学には勝てないなぁ」，「強すぎるから大学とやりたくないな」，「大学から 1 点は取れた」という声まで聞こえるようになっている．部の設立から深く関わっている職員Ｚさんは，大会の応援に行ったり，送迎をするなどカーリング部を後方から支援していた．その職員Ｚさんに，カーリングを始めた当初とどのように変わったかを尋ねた．すると「(3 年前は) カーリングにまだなってなかった感じがあったので，手取り足取りの部分だし．でもやっぱりカーリング経験者（=特待生）が入ったことによって，2 年目なので，自分たちの意識向上させるために技術も一緒に磨き始めて，すごい向上しているというか，上手になっているなという単純な感想はありました」と述べている．最終的に本学カーリング部は，9 名中２名が部員としての活動を４年間継続した．特にＤくんのように偶発的に始めたカーリングに没頭し，カーリング関係の仕事に就職する部員も見られた．彼の成長の中には，自主的スマートフォンを通じて情報を収集したり，特待生とマンツーマンで居残り練習をしたりするなど，カーリングへの主体的な学びの姿と向上心が垣間見えた．

第２に，カーリングの上達スピードの早さについてである．本学カーリング部のように，実質２年あまりで一定程度のレベルまで上達できる点も,「カーリング」の魅力であると考えられる. すなわち, 従来の五輪種目の多くは，幼少期からの鍛錬が要求される．例えば，20 歳から陸上や水泳を始め，いきなり全国大会に出場する選手は極めて稀である．しかしカーリングは，幼少期にカーリングを実施していなかった者たちが多く全国大会で活躍している．2019-20 シーズンの「全農日本カーリング選手権大会」に参加していた「宮城 CA」の男子選手の中には，カーリング歴２年という選手も見られた．この点は第 1 章で検討した「ニュースポーツ」的な側面であり，「初心者でも気軽に楽しめるような」要素, 初心者でも上達のスピードが速く, ある程度の水準にはすぐに到達できたと推察される．本学における筆者の体育実技の授業では，カーリングを教材として取り入れている．学生たちは，最初は氷上での運動に悪戦苦闘するものの，2 コマ程度の時間である程度のミニゲームが実施可能となる．このような体力レベルや技術に関係なく，試合を楽しめる点がカーリングにはあるものと推察される．現在の女子カーリングは，低年齢化が進み，2020 年 1 月の「北海道カーリング選手権大会」

には多数のジュニアチームが地区予選を勝ち抜いて出場していた．身体が未発達なジュニアも大人と対等に勝負ができる．このように体力レベル，筋力に大きく左右されない点もカーリングならではの光景と言えるだろう．

第 3 に，カーリングを通じた「まちづくり」としての可能性についてである．北海道の地方には，競技志向のカーリングではなく，交流や，レクリエーション的な要素が強く残るものも現存している．例えば，稚内市で行われている「市民カーリング大会」は非常にニュースポーツ的な要素を残している．本大会は，当日，即席でチームを作成する．2020 年 1 月の大会には，小学校 3 年生から 70 代の高齢者まで参加していた（写真 12）．体力レベル，年齢，性別に関係なく楽しむことができ，こうした様々な交流の仕掛けは，まちづくり，つながりの構築に寄与するものと推察される．同時にこうした姿は，先に引用した大沼のいう，「多様な町民が集まり，人びとのつながりの深さを見せてくれるのがカーリング場」であり，さらに「カーリングを五輪にまで引き上げていった源泉は，こうした人びとのつながりを絶えず編んできたこと」，「五輪選手の存在もこうした網の目の 1 つのように見えてきます」，「昔のままの社交空間をとどめています」という指摘に類似する姿である．筆者は，競技スポーツ的要素が強くなっているカーリング界だからこそ，こうした原風景をいつまでも残し続けることが重要であると考える．

写真 12　稚内市民カーリング大会の様子　子ども（左），部員（右），最高齢の男性（左奥）が同シートに

最後に，本稿の限界と今後の可能性について言及したい．本稿は，本学カーリング部の 9 名を主たる調査対象とし，彼らへのインタビュー調査や，参与観察をもとに論稿を進めてきた．そのため，調査対象者の限界，さらに全員が男子大学生というジェンダー的な制約がみられる．また，筆者が顧問であることから，調査対象者との関係性が良くも悪くも「近い」ことは否定できない．さらに調査対象者についても部員，学内の関係者に限られており，部活の成果を客観的に位置づけるためには，市内カーリング関係者，市役所職員など多方面からの調査も必要になると推察される．しかしながら，

本稿は，全国的に希有な競技であるカーリングを，部員たちの主体的な活動ではなく，理事会からの外発的な動機づけによってスタートしたものを４年に渡って捉えた．このことにより，前述までのような示唆を得られた．

末筆に今後の可能性については，5 点ほど述べたい．第１に，「特待生」や３年目に加入した部員も含めた多様な考察である．特待生たちがどのように部活，大会に臨んでいたのか，特に３年目から加入した特待生は，既存の部員たちをどのように見ていたのか，練習を工夫したのかなど新たな可能性が含まれている．第２に，前述のように稚内市では「新カーリング場」が 2020 年５月に完成予定である．既存のリンクは，温度が低く，ストーンが滑らない，曲がらないなど部員からも不満が多かった．大会が実施されるリンクとの差も大きく，ストーンの曲がりが不十分なため「カムアラウンド」や「プッシュ」などの戦術的な練習も十分に行えなかった．新カーリング場は，新たな戦術的な練習，大会使用のリンクとの差も少なくなるため，「カーリング部」の結果に影響を及ぼすものと推察される．第３に「カーリング研究」のさらなる蓄積である．現在のカーリング研究は，前述のように「物理学」の理論が応用できる理工学的な分野を中心とした戦術，バイオメカニクス的な研究が盛んである．一方の社会科学的な研究は，前掲の大沼，東原の研究を除くと，質，量ともに十分な研究蓄積とはいえない．また，カーリングの経験者，元選手が研究者であることは極めて少なく，選手目線からの研究の蓄積も十分であるとはいえない．第４に，カーリングの指導方法の探求である．現在のカーリング界は，どこのチームも同じ，似たような練習，コミュニケーションの方法であり，良くも悪くも「マニュアル」的な指導方法が大半である．今後は，カーリングの特徴に合わせた指導方法，初心者が楽しめるリードアップゲームの考案や，他のスポーツの戦術，作戦，研究成果の引用など，より学際的な議論が必要になると考えられる．また，教師，部活顧問向けの「指導書」も充実しているとは言えないため，今後の研究の蓄積が望まれる．第５に，他地域における調査の実施である．特に北海道南富良野町は目黒，寺田，山口など３名のオリンピアンを輩出している．また，北海道名寄市などはジュニアレベルから世界大会で活躍する選手を輩出している．道外に目を向けてみると，長野県軽井沢町では，長きにわたり継続的な選手強化が進み，国内トップクラスの選手を多数輩出している．地域の中に埋め込まれたカーリングの実践にこれからも着目することは，今後の日本のカーリング界の発展に寄与するものと推察される．以上の論点を筆者自身の研究課題とし，本稿を結ぶ．

●注

(1) 本稿では，「新カーリング場」の建設の是非を議論，分析することは主眼としていない．この報道の全容，稚内市議会議事録などは，各自でご参照いただきたい． 2019 年の稚内市市長選挙において「新カーリング場」建設の是非が，１つの争点となったことは付言しておきたい．

(2) 稚内市には，1945 年 10 月から 1972 年６月 30 日まで，アメリカ軍が駐屯していた．

(3) 本稿で扱う「カーリング」は，カーリング経験者の発言が多い．また，筆者もカーリングの大会に出場し，カーリングのルール，戦術などを理解している．そのため，「ルール」，「作戦」などについては，ある程度の事前知識が必要である．

カーリング初心者の方には，北海道カーリング協会のリーフレットをご参照いただきたい．

http://www.curling.hokkaido.jp/dl/pdf/introductory_book_2015.pdf

(4) Window 版 PC の代表的なインターネットブラウザである IE，Google Chrome，FireFox の最新版で検証

(5) 全日本カーリング選手権大会では，2020 年大会からレギュレーションが大きく変わった．今大会からワールドカーリングツアー（WCT）最上位，ワイルドカードなどが新設され，これまで実力，競技者数ともに多かった北海道の出場枠は 3 から 1 枠に減少した．

(6) カーリング用品は，基本的に海外メーカーから購入する．ブラシは，年に 1 回程度各社から新製品がでている．部員たちが使用するブラシの相場は 2～3 万円前後である．ブラシは大会ごとにパッドの交換が必要で，「交換パッド」は 3000 円前後で販売されている．シューズは，パッド同様海外からの輸入が中心であり，相場は 2 万～5 万円程度である．シューズのモデルチェンジは，ブラシよりも比較的遅い傾向にある．以上のように，カーリング用具は，輸入品が多く，学生たちにとって決して安くはない金額である．

●参考文献

上野裕暉，桝井文人，柳等，平田洸介，2014，「カーリングインフォマティクスにおける試合情報解析のために-ポータブル戦術支援 DB システムの改良-」，情報処理学会，『第 76 回全国大会講演論文集』，2014(1)，627-629.

北海道カーリング協会　http://www.curling.hokkaido.jp/（閲覧日：2020 年 2 月 2 日）

公益社団法人日本カーリング協会，
http://www.curling.or.jp/about/about000.html（閲覧日：2020 年 2 月 11 日）

公益財団法人日本オリンピック委員会，「カーリング」（閲覧日：2020 年 2 月 11 日）
https://www.joc.or.jp/sports/curling.html

公益財団法人日本サッカー協会，「サッカーはいつから始まったの？」（閲覧日：2020 年 2 月 2 日）
http://www.jfa.or.jp/info/inquiry/2011/11/post.html

前田和司，2006，「スポーツのグローバリゼーションと周縁における創造性」，松村和則＝編『メガスポーツイベントの社会学－白いスタジアムのある風景―』，南窓社，東京，pp.180-208.

桝井文人，柳等，伊藤毅志，2018，「工学的アプローチによるカーリング戦術支援 (特集 冬季オリンピック・パラリンピックを支える科学技術)」，『化学工学』82（2），84-87.

文部科学省，「大学設置基準」（閲覧日，2020 年 2 月 11 日）
http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/kitei/reiki_honbun/w002RG00000949.html

本橋麻里，2019，『0 から 1 を作る～地元で見つけた，世界での勝ち方』，講談社現代新書，東京.

仲野隆士，2006，「ニュースポーツの人口動態」『体育の科学』56（5）：361-365.

野々宮徹，1993，「ニュースポーツへの接近」，野々宮徹研究代表，『ニュースポーツとは何か　そのスポーツ史的研究（水野スポーツ振興会助成金研究成果報告書　平成 4 年度）』，ニュースポーツ研究会，名古屋：3-16.

大沼義彦，1998，「北海道の地域スポーツ」，須田力編『北方圏住民の生活とスポーツ』，共同文化社，札幌，pp133-178.

大沼義彦，2010，「小さな町の大きな挑戦」，石井隆憲，田里千代＝編著『知るスポーツ事始め』，明和出版，東京，pp2-6.

笹瀬雅史，1992，「地域に根ざす生涯スポーツの展開と動向」『文化女子大学室蘭短期大学研究紀要』

15：14-30.
進藤省次郎，2008，「球技の本質とは何か」，『北海道大学大学院教育学研究員紀要』104：1-16.
清野惇，2009，「私立大学における課外活動とその法的諸問題」，『修道法学』32（1），374-349.
東原文朗，2019，「よそでおこなわれていないスポーツを振興していたら，まちづくりにつながった！育つべくして育ったカーリング娘」，松橋崇史，高岡敦史＝編著『スポーツとまちづくりの教科書』，青弓社，東京，pp.118-122.
山本雅人，伊藤毅志，桝井文人，松原仁，2018，「カーリングと AI」，『情報処理』59（6），500-504.

●謝辞

本稿は，平成 29 年度稚内北星学園大学 COC 事業「地域志向教育研究経費：『運動部学生による地域のスポーツ文化構築に向けた取り組みとその可能性～稚内北星学園大学カーリング部の歩みを事例に～（研究代表者：佗美俊輔）」より研究資金の助成を受けて執筆されました．研究経費を助成いただきましたことにつきまして，感謝申し上げます．

末筆になりましたが，本学「カーリング部」，調査へ協力してくれた学生，事務職員，稚内カーリング協会，稚内市内のカーリング愛好者の皆様にも御礼申し上げます．

●英文タイトル

Initiatives of the Curling Club for four years and the potential of community development
～ A case study of Wakkanai Hokusei Gakuen University Curling Club ～

●英文要約

On February 13, 2017, the Wakkanai Hokusei Gakuen University Curling Club was established. Nine freshman students who had no curling experience joined the school to start recruiting students using "curling scholarship students" the following year. This article describes the activities of students who started the curling club from "zero" for four years, including the flow of club activities and practice, competition results, thoughts on club activities, creative ingenuity in practice, and the possibility of "community development". This is an attempt to pursue and summarize the results mainly through participant observation and interview surveys.

The purpose of this paper is to give a bird's-eye view of the activities of the students who have been active since the start of the project, based on the case study of the curling club established at Wakkanai Hokusei Gakuen University. In addition, we will explore their potential for "community development."

The curling club at the time of its establishment had been losing in tournaments in Wakkanai City, but now, after about four years, the team has improved to the point where there is no enemy in the city. Eventually, two of the nine members continued their activities until the fourth grade as members.

●英文キーワード

Curling

Club

Community development

Participation observation